

文化体験授業に対する短期留学生の期待と評価

ーアンケート調査とインタビュー調査の結果からー

谷川依津江

甲南大学 国際交流センター

神戸市東灘区岡本 8-9-1, 658-8501

概要

甲南大学日本語短期留学プログラムに参加する留学生が、日本文化体験授業をどのように評価しているか、また何を期待しているのかを明らかにし、文化体験授業における教師の役割について検討した。専門家を招いた短歌のワークショップ開催後、対面インタビューを行い、発言を定性的コーディングすることで、分析・考察を行った。文化体験が①普通の授業からのいい意味でのbreakになったり、②それぞれの「文化論」構築の一助になったり、③間違いや、言語の壁による失敗を恐れることなく、安心して日本文化に触れられる場になっていることが明らかになった。また授業担当者のファシリテーションの仕方が学習成果に影響を与えることが予測される。

キーワード: 文化体験授業、留学生の期待と評価、「文化論」の構築、正確さからのbreak、ファシリテーター

1 はじめに

本稿の目的は、甲南大学における半年もしくは1年間の短期留学プログラムで日本語を学習している留学生が、日本文化体験授業をどのように評価し、何を期待しているのかを明らかにし、そこから日本語教師が文化体験授業において担う役割を検討することである。

甲南大学 Year-in-Japan プログラム（以下 YIJ プログラム）では、海外の提携大学からの留学生を受け入れており、彼らはそれぞれの日本語学習歴や日本語能力に応じて、4レベルのクラスで学んでいる。通常の授業では、日本語の教科書を用いた文法や語彙などの言語知識の習得に加えて、読解やプレゼンテーションなどを通して日本文化について学んだり、日本人大学生が授業に参加する日本語サポーター制度により、彼らと交流したりする機会が設けられている。また通常授業とは別に、日本の伝統文化の体験を目的としたワークショップや、各学期に一回ずつ行われる研修旅行を通じて、日本文化を実際に体験できるプログラムとなっている。

YIJ プログラムでは、伝統文化に取り組むことで留学生がより深く日本文化を知り、理解できる体験学習プログラムの開発を目指し、文化体験型ワークショップを実施している。今回はその文化体験型ワークショップの一環である短歌ワークショップ実施後に、参加した留学生に対して、インタビュー調査を行い（プログラム参加学生 22 人のうち、9 人の学生がインタビュー調

査に応じてくれた)、留学生が文化体験の授業に対してどのように感じたのか、何を学んだと思ったか、またどのようなことを期待しているのかを調査した。

2 外国語学習と文化

近年、外国語学習において、目標言語の文化の学習は不可欠であると言われている。アメリカの21世紀における外国語教育の方向性を示した「外国語学習スタンダード」にも「Culture: 他の文化への知識と理解を深める」ことが目的として示されている。国際交流基金がCEFR (Common European Framework of Reference for Languages) に基づいて枠組みを開発した「JFスタンダード」においても、異文化理解能力の育成が目的として掲げられている[2]。その他にも、高校からの外国語学習の指針として作った「外国語学習のめやす」にも21世紀のグローバル社会を生き抜くための力として、他の言語を学び、異なる文化に触れ、コミュニケーションをすることが重要であるとしている[3]。

それでは実際の日本語学習者への授業において「文化」とは一体何を指すのだろうか。これまでの日本語教育においては、日本社会を理解するために、現代日本の様相を知ることが重要であり、日本人の行動様式や思考様式を教える必要がある(ネウストプニー 1995)と考えられてきた時期もあった。これはつまり日本社会にはある特定のルールがあり、日本人はこのように行動するのであるといった、集団類型化の傾向が強い視点であった。

しかし細川(2002)は、従来の、国や言語別に文化の境界を設定し、その違いを知識として知る「異文化理解」は、ステレオタイプの強調や、目標言語の文化への同化を強制することになりかねないという問題点を指摘している。その上で細川は、様々な異文化体験をすることで「今まで自分が無意識に過ごしてきた日常のありようを相対的に見るようになることによって、その自分の中にある日常の習慣を一つの文化として捉えることができるようになる(細川 2002 p.168)」と述べた。また90年代頃から、教室活動における教師と学習者、また学習者間の相互性・協働性が注目されるようになり、教材中心読解型から自己発信表現型へと教室活動が変化してきたこともあり、このような立場から、細川はそれぞれ個人の中にある「文化」をどのようにして引き出すか、また発信させるかということが課題になってくると述べている。

3 日本語の授業と文化

3.1 教師の期待と懸念

では実際、日本語の授業において文化はどのように扱われているのだろうか。森川(2019)、森川・永須(2019)が行った日本語教師を対象としたアンケート結果によると、多くの日本語教育機関において文化に関する教育を行っている、または文化体験の取り組みがされていることが分かる。その取り組み方としては、季節の行事にちなんだイベント(七夕、節分、浴衣の着付けなど)が多い。また、多くの日本語教師が「文化を教えたい」と思っていることや、短歌や能楽などの伝統文化を教えることに肯定的であることも明らかにされている。

しかし、森川(2019)によると、授業において文化を教えたいと思っている教師は多いが、同時に「やってみたいが無理だと思う」と消極的な考えを示す教師もいることが分かる。その理由として森川は、「教えられるスキルも知識もないこと」、「その道の専門家ではないこと」、また「学習者の興味関心の向けどころや、理解力に期待できないという見込み」などを挙げている。また、日本語学習者のニーズのみを重要視すると、日本語学習の目的・理由で最も多いものは「マ

ンガ・アニメ・J-POP・ファッション等への興味 (66.1%)」であり、次いで「日本語そのものへの興味 (61.3%)」「歴史・文学・芸術等への関心 (52.4%)」となっており¹、文化に関する授業で扱うトピックに偏りが出ることが懸念される。

3.2 文化教育の提案

細川は、文化理解にとって「表象→認識→記述」(細川 2002 p.172)の円環がきわめて重要であると述べている。「表象」とは、私たちの目に見える自然の風景、伝統文化、また文学作品などのことを指す。これらを私たちが把握する際に、関心を持つか持たないか、いいと思うか思わないかなど、その「認識」の仕方や判断の方法は個々で異なり、この認識こそが「文化とは何か」を規定するとしている。それぞれがどのように認識したかについては、外側からは分からないため、その認識を記述してもらうことによって、それを明らかにする。他者に向けてどのようにその認識を記述するかを考える過程において、自らが発見した習慣を「文化」として自覚的に取り出し、それを解釈することになると細川は述べている。

このような過程を経ることで、学習者は以下のように「文化」を「能力」として身に付けていくとされている。

コミュニケーション活動を行いながら、学習者がその言語活動のやり方の中に価値コードとしての「文化」を発見し、その「文化」を自分なりに「文化論」化して、いろいろな場面・状況の中で使用していく。この複合的かつ重層的な連続の中で文化は獲得されていることになる。この場合の「文化」とはもはや知識情報ではなく、能力である(細川 2002 p.176)

大切なのは、新しい知識に出会ったときに、それについて相手に問うコミュニケーションの力を持っていること、またその状況を認識できる力を持っていることなのだとして細川は述べている。

以上のようなことを鑑み、YIJプログラムでは専門家による文化体験ワークショップを、全レベルを対象に実施した。そして留学生がワークショップで扱う「文化」に対する認識をするための準備、またどのように「文化」を認識したかアウトプットする機会を設けた。またワークショップ中に、講師と留学生、留学生間のインタラクションの時間も設定した。

4 YIJプログラムにおける短歌ワークショップの取り組み

4.1 短歌ワークショップの実践

2019年11月29日に、YIJプログラム参加留学生全員を対象とした短歌ワークショップを実施した。講師として、歌人なべとびすこ氏を招き、中級・上級レベル、初級・初中級レベルの2グループに分けて行い、それぞれの授業担当者がアシスタントという形で参加した。短歌に関する基本的な知識を学んだ後、5音・7音の言葉が書かれたカードを組み合わせる短歌を作るカードゲームを行った。このカードゲームでは、偶然できた短歌に留学生が解釈を考え、それをお互いにシェアし、また講師からその解釈に対する評価や、講師の解釈等をシェアした。その後、このワークショップ前に研修旅行で訪れた高野山での経験をもとに、それぞれの留学生が短歌創作に取り組んだ。ワークショップの最後には、留学生自身が創作した短歌を短冊に書き、お互いの作品を読み合い、好きなものを5首選んで投票する時間を設けた。(表1参照)

ワークショップ前に、ワークシートを配付し、これまで学んだことのある詩の特徴(ルールや

¹ 国際交流基金(2019)の調査結果による

表現方法など)、また詩の授業に対する思いなどを書いてもらった。ワークシートの取り組みは、母語の詩に使われるルールや表現などは、何のためにあるのか、どのようなテーマの詩が多いか、また学校の授業の詩でどのような活動をしたのか、それに対してどのように感じていたかなどを思い出してもらい、短歌との比較がしやすいように、認識の準備として行った。

ワークショップ中は、そのワークシートに短歌について学んだこと(ルール等)、またワークショップ中に創作した短歌についてどう思ったか、他の学生からどのようなコメントをもらったかを書き加えてもらった。またワークショップ後にも、そのワークシートを用いて、すでに知っていた詩との違い、自分で短歌を作ってみて楽しめた点、難しかった点、普段使っている日本語と違うと感じた点などを振り返ってもらった。

表1 短歌ワークショップスケジュール

短歌ワークショップ Tanka Workshop

time	Class 1 & 2 (谷川・平井) Lecture Room B	Class 3 & 4 (森川・林・井上) Lecture Room A
9:00	<ul style="list-style-type: none"> ★ 短歌って何? (なべとびすこ先生) What is Tanka? ★ みそひとさじカード+短歌パターンで練習 Practice making Tanka using Misohitosaji cards 	<ul style="list-style-type: none"> ★ 短歌の基本情報 (森川先生) What is Tanka? ★ みそひとさじカード Play Misohitosaji cards
9:40	<ul style="list-style-type: none"> ★ みそひとさじカード Play Misohitosaji cards 	<ul style="list-style-type: none"> ★ 短歌作成のステップの説明 (なべとびすこ先生) Steps in writing Tanka ★ 短歌作成 (高野山の写真を題材に) Let's make Tanka. (theme: Koyasan)
10:00	<ul style="list-style-type: none"> ★ 短歌作成 (高野山の写真を題材に) Let's make Tanka. (theme: Koyasan) 	
10:20	<ul style="list-style-type: none"> ★ 短歌の清書 (短冊) + 評価会準備 Let's get ready for group evaluation <p style="margin-left: 40px;">①短冊に短歌を清書 Write your Tanka on the Tanka card. ②短冊下部にポストイット (大) を貼る (投票シールを貼るため) Put sticky note on the bottom of your Tanka card. (for vote stickers) ③講義室 A のデスクに短冊を並べる (写真は短冊の上部に配置) Place your Tanka card on the desks in Lecture Room A (your picture above the card)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ★ 短歌の清書 (短冊) + 評価会準備 Let's get ready for group evaluation
10:30	<ul style="list-style-type: none"> ★ 短歌評価会 Lecture Room A 投票 Let's vote! 「いいね!」賞、なべとびすこ賞 発表 Good! Awards and Nabetobisuko Award 	

4.2 留学生の反応（ワークシートから）

ワークシート（22名の参加学生のうち、20名の学生がワークシートを提出した）によると、短歌と詩の違いに関して、「短歌のほうが短い」と半数以上（13名）の学生が答えていた。音の数が決まっていることに対して「厳しい」「制限がある」と述べている学生が4名いたが、同時に「一つしかルールがないことで自由度が上がる」「リズムカルだ」など肯定的なコメントも6名のワークシートに見られた。詩との比較をしたことで、短歌の特徴に対する認識へとスムーズに繋がり、自分なりの捉え方ができていたと言えるだろう。

また実際に短歌を創作してみた感想としては、「自分ではそれほどいいものが書けたとは思わなかったが、先生や友だちからいいと言ってもらえた」など、他人からいい評価をもらったと述べている学生が17名と多かった。最後にお互いの短歌を読み合い、投票したことや、普段は同じ教室で学んでいないレベルの異なる友人と話し合ったり、助け合ったりしながら短歌の創作をすることで、難しいだけでなく、いいものができたと思える機会が持てたのではないだろうか。

短歌の創作にあたって楽しかった点と難しく思った点は、その両方に、もしくはどちらかに「伝えたいことを、57577の音に入れること」とほぼ全員（18名）が答えていた。辞書を使ったり、先生に聞いたりして、ぴったりの音数の言葉を探すことが難しくもあり、面白いと感じる点でもあったようで、「fun challenge」「difficult but necessary」のような表現が多く見られた。これは学生の日本語のレベルの違いによるものではなく、上級レベルの学生も、初級レベルの学生も同じように、適切な語や表現を探すことを、難しくも楽しいプロセスだと捉えていたからだと言えよう。また自分の日本語力不足や、短時間で作らなければならないというプレッシャーを難しかった点に挙げている学生もいたが、同時にそれらを乗り越えて「作ることができた」という達成感があつたとも答えていた。今回、短歌の創作の際のテーマとしたのが、高野山への研修旅行であったため、それぞれに伝えたい気持ちや思い出があり、お互いの短歌を読み合う際にも共感できることが多かったことが、短歌という新しい「文化」を用いて、お互いにコミュニケーションを取り、自分なりの解釈をするというステップを円滑なものにしたと考えられる。

短歌の日本語が普段の日本語とどのように違うかという質問に対しては、半数近く（8名）が「文法による制限があまりない」と答えていた。この回答については、その後行ったインタビュー調査によって、学生たちが意図するところが明らかになった。その他には、「イメージが湧きやすい言葉を使った」「新しい言葉を使った」「文学的な表現を使おうとした」など、語彙や表現に注意を払う機会が多かったこと（6名）が挙げられていた。これらのことから、短歌の創作が、教科書に出てくる語彙やホストファミリーや日本人の友人との会話の中では出会わない語彙や表現を、自覚的に使用する機会となっていたことが分かる。

5. 留学生の期待と評価（インタビュー調査から）

5.1 インタビュー調査の概要

短歌ワークショップに参加した留学生22名のうち、調査に参加してくれる学生をボランティアで募り、9名の学生（学生A~Iとする）にインタビュー調査を行った。インタビュー調査を行った時期は、2019年12月9日~13日の間である。3名が初中級レベル、残りの6名は中級・上級レベルの学生である。

インタビューは、学生と筆者の一対一で（学生A~Gとは英語で、学生Iとは日本語で）行い、短歌ワークショップスケジュール（表1参照）を見てワークショップの流れを思い出しつつ、①その時どんな気持ちでいたか、②〇〇の印象はどうだったか、③印象に残っていることは何か、④自分にとってどんな発見・学びがあったか、⑤疑問点はあったか、という問いかけをきっかけとして、自由に話してもらった。それぞれのインタビューは30分程度で、ICレコーダーで録音を行った。

5.2 分析方法

9名のインタビューの文字化資料に対して、佐藤（2008）を参考にしながら定性的コーディングを行った。学生の発話からサブカテゴリー（ワークショップについての感想、短歌創作についての感想、短歌創作と日本語学習、ワークショップにおけるインタラクション、文化を知ること、文化と言語の関係、文化とは何か）を作成した、さらにサブカテゴリーの類似性から、カテゴリー（ワークショップの意味・役割、文化を知ること）へと集約した。

5.3 結果と考察

5.3.1 ワークショップの意味・役割

アンケート調査等でワークショップに対する感想を問うと、多くの場合「楽しかった・よかった」という感想が述べられることが多いが、今回のインタビューではその理由について、いくつかキーワードとなる表現が見受けられた。それらのうちで特徴的な表現だと思われる一つが「break（休憩）」である。YIJプログラムでは、午前中の2～3時間が日本語の授業にあてられている。留学生たちはそれぞれのレベルに分かれ、毎日教科書を用いて、文法や語彙を学んだり、読解や聴解に取り組んだりしている。その同じようなペースで続く日々からの「break」が必要であった、という発言があった。

学生B

It's one of them, have so many weeks of very similar structured lesson, it really stands out. What we take away is what we learned on that day.

学生C

And it's your brain that it's kind of hard doing the same thing every day even thought that's the purpose of being here. It is hard to make yourself do the same thing every day.

学生H

That's actually good time for it, because it is kind of a break and it is, people are getting tired of doing the same thing, so it's something different.

学生I

短歌っていう新しくて、フレッシュな経験がよかった。新しさが楽しいと思った。そういうことを時々したら、間違いなく楽しくなると思います。

これらの発言から、文化体験ワークショップがただの楽しいイベントとして捉えられてしまっているような印象を受けるが、さらに学生の発言を追っていくと、「creative」「correct」という言葉が出てくる。通常の授業スケジュールからの「break」として以外に、文法や語彙のクラスでは常に正確性を問われ続けているため、そこから離れ、創造する機会が多いワークショップを「正確性からのbreak」と捉え、「楽しい」と評価していることが分かった。そしてこれがワークシートにおいて「文法による制限があまりない」と答えていた真意である。

学生B

You could drop particles, which we will not be allowed to do in class. and it was more about the effect of the poem on the reader, as opposed to being grammatically correct. and I thought that was really nice to see because I didn't really get that much of a chance to do that normally, like have something we can create and kind of make the rules a bit more flexible.

学生C

I thought that was like, relatively has a lot of **creative expressions**. And I was like "Oh, that's really neat."

In class, here's a grammar structure, okay let's try making sentences. Or maybe you were asked to write an essay, a short one. I felt more freedom because you **don't really have to worry about the grammar structure in Tanka**.

学生D

Tanka was a little bit like, I don't know a change, yeah, a **chance to be creative**.

学生E

This one was **more creative** than like testing knowledge in the classroom. I think because this one we have, like, just the vague rules and **there's not right or wrong answer**. Whereas like on a test, if you get an answer wrong, it's wrong.

学生F

I wasn't worried about it being a structurally sound sentence, because it's a poem.

この自由に「創造する」という機会を得ることが、日本語の学習に大きな影響を与えていたことも、インタビューから明らかになった。通常の授業では学んだ文型と語彙を正しく用いて文を作ることが求められるが、短歌ワークショップでは、自らの高野山での思い出や感想を、短歌のルールを用いて表現することが求められる。この過程において、必要とされる音数にあてはまる表現を、時間をかけて探すことになったのだが、それに対してワークシートでは「fun challenge」と述べる学生がいた。それが様々な語彙に触れるよいきっかけとなり、語彙の習得に繋がったかどうかは不明ではあるが、とても能動的に語彙に取り組む時間であったことが分かる。他にも、授業で正しい文法を学んでいるからこそ、短歌ワークショップでそのルールを破ることができ、それが面白さに繋がったと述べている学生もいた。

学生A

I think it encourages, even from like my case, it really **encouraged me to think about the words**. You have a motivation to go look up words, double check words that you already know, and how many syllables. It's good because it helps it give you an opportunity to work with the language.

学生B

It was really **nice to see that the words I looked up, because the words that I wanted to say**, and not words that I have to learn for a text. I thought that was really nice.

学生E

There is a saying that like, **you need to understand the rules to be able to break them**. So, I feel like if you want if you're doing creative stuff, and you want to play around with the rules and switch things up, then you have to know what you're doing. So I think that could be motivation.

学生I

美術として、アートフォームとして、これが短歌だというコンセプトがある。**形が決まっているから、その形を使ってどういうふうに気持ちを伝えられるか考えるのが面白い**。短歌の形を使って、どういうふうに自分のアイデアを表すのかが面白いのかなと思います。

アンケート調査でよく見られる「楽しい」という表現には、「ただイベントとして楽しい」、または「教科書を使った授業をしなくてもいいからよかった」という意味だけではなく、さらなる学習動機に繋がるような、学びに対する楽しさを感じているということも含まれることが分

かった。

次にワークショップ中のインタラクションに関する発話を見ていく。今回のワークショップは2つのグループに分けて行ったが、最後に全員の短歌を読み合う時間があった。通常の授業とは異なるクラスの学生と一緒に短歌の創作に取り組むことや、お互いの短歌を評価し合うことについて、肯定的な意見と同時に、どちらかという消極的な意見も見られた。また日本人大学生に参加してもらったとしたら、どう感じるかについても考えてもらったところ、同様に肯定的意見と消極的意見があった。

<肯定的意見>

学生B

Just having a Japanese student's opinion on the same things we do. **Just being able to see a different opinion and have some help if we needed help.**

I think that **seeing everyone working hard really makes you want to work hard.** so I thought it was really nice.

学生F

I thought that was fairly fun. (to read other students' Tanka) It was nice to see everybody's Tanka especially class 1 and class 2. Get all together and **show off to each other and be like "oh you did so good."** I think that was a fun part of it.

<消極的意見>

学生D

I feel like it depends on what we're doing. Because if it was something like Tanka, I feel like **I'd be a little intimidated** if they're [Japanese students] watching us.

学生G

Actually, it made me realize that **everybody else has better Japanese than me.**

短歌ワークショップでは、通常授業のように正確さが求められないことが創造性や動機に繋がると答えていたが、母語話者や、自分よりも上のレベルの学生と一緒にとなると、やはり正確さや知識の量というところで比較してしまい、臆病(intimidated)になってしまうのかもしれない。しかし反対に他の学生が頑張っている姿を見ることが、自分の学習動機に影響を与えた、またお互いに褒め合うことがよかったと、他レベルの学生とのインタラクションに対する肯定的な評価も見られた。このことから、留学生と日本人学生とのインタラクション、または留学生間でも、日本語のレベルの異なる学生間のインタラクションを設定する場合は、どのような目的で、どのような効果を期待するインタラクションなのかを考慮し、留学生が臆病になってしまわないような配慮が必要だと思われる。

5.3.2 文化を知ること

文化を扱う授業において、ステレオタイプの強調にならないように、文化の押し付けにならないように気を付けなければならないことは、すでに述べた。今回、短歌をワークショップで扱う際に、短歌にはルールがあることは述べたが、そこから派生して日本文化の特徴などを説明することなどはしなかった。しかし学生の中には、短歌の特徴から、シンプルであることや自然の大切さといった日本文化の美学 (aesthetics) を捉えようとしている学生もいた。

学生B

It kind of matches with what I've learned about **Japanese aesthetics**, and like **simplicity** and that kind of thing.

学生H

Like Japanese art and poetry, they seem like talk about nature and stuff a lot.

Nature is an important part of Japanese art and culture.

また今回扱った短歌は、近年の日本語学習者の学習動機の上に挙げられるものではなかったが、短歌を学んだことに対する感想として、インタビューでは次のような意見が見られた。

学生A

It's good to be exposed to those sorts of things. I mean they are aware that **they exist.**

学生B

Maybe you might not be interested in the beginning, but **trying is a good opportunity.**

学生D

It was such a huge part of Japanese culture and **it's something I've never done in America. I never thought I would be doing.** I was really immersing myself in the culture. So that was a good experience. It's always **good to take a chance because you never know.**

学生H

I found out Tanka actually exists. I don't know Tanka before. That was the first time to be exposed to it.

学生I

すぐに使う知識じゃなくても、他の本とかインターネットで見ることがあるかもしれないから、**知っているということが大事**だと思います。

これまで興味がなかった短歌についても、存在を知ること、また経験することの重要性を述べていた。学生のニーズに応じて、学習動機の上に挙げられるマンガ、アニメ、J-POP、ファッションなどを扱うことも必要ではあるが、普段の生活で知る機会の少ない文化をワークショップで扱うことにも大きな意味があると言えるのではないだろうか。まずはいろいろな日本文化に触れ、認識することで、自分なりの解釈をしていくことが異文化理解に繋がることを考えると、伝統文化なども積極的に日本語プログラムに取り込んでいくことの妥当性はあると考えられる。

またワークショップという形で、新しい文化に触れることを「安全だから楽しめる」と答えている学生がいた。日本に留学し、日本語を学んでいる学生にとって、授業だけではなく日々の生活そのものが異文化体験であると言える。しかし日々の生活で接触する異文化は、留学生のために「調整」されたものではなく、いわゆる「生」の文化である。特に、言語の壁があると感じる初級・初中級の学生にとって、そのような形で新しい文化に触れることには、「何か大きな失敗をしてしまうのではないか」また「失敗したときに、どうすればいいのか」という大きな不安がつきまとう。それに対してワークショップでは、言語での問題が生じた時にすぐにサポートが受けられ、また人間関係を脅かすような致命的な失敗はないという安心感があるため、楽しんで異文化体験ができるようである。文化体験ワークショップは、文化に触れるだけではなく、社会的コンテキストにおいてもその価値があると言えるだろう。

どちらにも共通して言えることは、どのように「文化」を導入するのか、そのための丁寧な準備が必要であるということではないだろうか。

学生C

Trying something new that you might be interested or not be interested, but in an environment where it was okay, was very rewarding for me. Because

sometimes it's hard for me to feel comfortable trying new things if there is a very distinct language barrier. And since there wasn't, it was a little easier for me to be okay. **I can do what x, y, and z and feel okay. Because the environment is very safe** and it's just for fun. You don't feel any pressure, beat yourself up over something you can't do correctly.

学生F

I feel like that that kind of workshop had **its value in a social and cultural context.**

最後に「文化を学ぶこと」「文化を知る意味」についての学生の発話を見ていく。短歌ワークショップの印象などについて話してもらっているときに、このような文化について学ぶためのワークショップは必要だと思うかと質問したところ、9人全ての学生が「必要である」と答えた。日本語を学ぶ際に、文化を知ることの重要性として、実際に見えることの裏にあるメッセージを理解するため、様々なものの良さを知らため (appreciate)、日本の社会の在り方 (社会的規範や期待、政治情勢が人々に与える影響など) を理解するため、言語のニュアンスを理解するため、などを挙げていた。これらは、どちらかというと言語スキルの上達のためというよりは、目標言語である日本語母語話者たちと関係を結ぶために必要な知識や情報だと考えられないだろうか。学習者も文化をただの知識としてではなく、教師側が期待するように、「自分なりに『文化論』化して、いろいろな場面・状況の中で使用していく」(細川 2002) ことを意識しているようだということが明らかになった。

学生A

And not only will you be able to comprehend what is being communicated to you, I'll enjoy it more, because I have a much **richer understanding** of what it is about, and richer experience of reading. but it will enable you to think critically about the culture you are in and what it is that and being more aware of what sort of things people are saying how that might contradict what you might want to think is actually being communicated in your culture.

学生E

If you want to learn any language, **you have to know something about the culture behind it to fully understand it.** Because the language and the words, they didn't just come out of thin air into society. They come from a long history of language, a long history of people coming together. So, cultural background is, maybe it's not like a main focus of learning a language, but it enhances your understanding a lot.

学生F

I feel like you can get a **fuller experience** of the language you're learning and maybe more of the **nuance** of it. Then you can maybe pick up on if you have some kind of cultural context.

学生H

In order to really have the communication you have to know the culture, **how to convey the message,** because of course, the cultures are different, but people are people everywhere.

実際に学生は、以下に示すように、文化を知ることによりよいコミュニケーションがとれるようになる」と述べている。文化を知ることと、言語知識を得ることはそれぞれに意味があり、よりよいコミュニケーションをとるための力の両輪となることを自覚しているのではないだろうか。

学生C

If you know the culture, you can speak the language better or **if you know the culture, you can communicate better using the language**. I'm talking about societal norms, expectations, and like what people like and not like what they think, but it's like what they're getting like from their own environment.

学生F

I feel like it does **make it easier to develop relationships** or understand why people act the way they do. Or maybe like the things that there may be alike a sense of humor or you know, something that they grew up with and understand maybe jokes that you would miss if you didn't know. And so I feel like **knowing cultural context makes you a better communicator**.

では、「文化」は文化体験ワークショップなどを通して、どのような学生にも教えることができるのだろうか。これに関する学生の発話には、文化は教えるというより経験することである、また文化を学ぶ意味や学ぶためのサポートなど、学ぶための姿勢作りが必要であるという意見が見られた。

学生F

Something could be taught, but through this kind of workshop, you experience it.
I think that maybe in a condition where I'm not thinking about my grade.

学生E

If you want to do something, **you have to find the significance in it**. And I think in this case, the significance is just like getting a better appreciation and understanding for the world and for the beauty of the language and things like that.

学生H

Reinforcement will be needed to help students who aren't as motivated or just don't know in general, don't understand why it is significant why they should care.

学習者自身も「文化」を教えること・学ぶことは難しいと認識しており、またそれが学習者の「文化」を学ぶ姿勢によって変わってくることを理解している。このことから、学習者が新しい「文化」に接触する前には、認識の準備が必要であり、文化体験授業の間には教師による何らかのファシリテーションが期待されていると言えるだろう。

5.3.3 日本語教師が担う役割

インタビューにおける発話から、文化体験ワークショップに対するこれまで見えてこなかった学生の評価や期待が明らかになった。例え日本語学習者にとって興味のないようなものであっても、文化体験の前の準備を丁寧に行い、認識へと繋がるプロセスがスムーズに進むようなサポートができれば、それは細川（2002）が言うところの学習者それぞれの「文化論」を形成する助けとなり、様々な状況で使える「能力」となるだろう。授業を担当する日本語教師が「文化」のエキスパートでなかったとしても、その準備の段階で、文化体験のファシリテーターとしての役割と果たすことができれば問題ないのではないだろうか。逆に、今回学生の発話に見られた「安全な環境」が提供できなければ、担当教師が優れた文化知識を持ち合わせていても、学習者にとって有益な体験授業を展開することは困難になると考えられる。

これは、文化体験の場におけるインタラクションについても同様であろう。「正確さ」よりも、「創造性」が発揮でき、また自らの発信する意欲を掻き立てられるような活動を行う中で、どのようなインタラクションを行えば、学習者の学習動機に繋がるのだろうか。日本語母語話者とのインタラクションが、「正確さ」を必要以上に意識することで学習者の臆病さ(intimidated)に繋がってしまうのではなく、新しい認識や、さらなる学習動機となるように、ファシリテーターとしての役割が日本語教師には望まれているのである。

6 おわりに

1980年代以来、外国語教育においては文化の学習が必要であるとされ、日本語教育においても様々な形で文化学習が取り入れられてきた。しかし言語知識とは異なり、固定的な知識として扱うことが困難な「文化」を、どのように授業で扱うのか、また「文化」のエキスパートではない教師に何ができるのか、学習者にとって果たして有益なものになっているのかという不安は、常にある。加えて、プログラムとして言語学習と有機的に連関できているのかという疑問もある。本稿で明らかになった留学生の日本文化体験授業に対する期待と評価をもとに、より体系的なファシリテーションの方法や、文化の認識へと繋がる、学習者の気づきを促すような、また、文化体験がシステムとして上手く組み込まれるようなカリキュラムの開発へと繋げていきたい。

参考文献

- [1] 国際交流基金日本語国際センター, 外国語学習スタンダード 日本語翻訳版 (翻訳者: 聖田京子), web公開版,
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/syllabus/pdf/sy_honyaku_9-1usa.pdf
- [2] 国際交流基金, JFスタンダード【新版】利用者のためのハンドブック, 2017,
https://jfstandard.jp/pdf/web_whole.pdf
- [3] 国際文化フォーラム, 外国語学習のめやす2012 PDF版, 2012, https://www.tjf.or.jp/wp-content/uploads/2019/08/02meyasu2012_final.pdf
- [4] ネウストプニー, J.V., 新しい日本語教育のために, 大修館書店, 1995
- [5] 細川英雄, 日本語教育は何をめざすか, 明石書店, 2002
- [6] 森川結花, “日本語教育における伝統文化をテーマとした異文化理解プログラム開発の可能性,” 甲南大学教育学習支援センター紀要4号, pp.53-64, 2019
- [7] 森川結花, 永須実香, “日本の伝統文化体験から得られる学習者の気づきと教師の役割,” 2019 CAJLE Annual Conference Proceedings, 2019
- [8] 国際交流基金, “2018年度海外日本語教育機関調査結果 (速報値)”, 2019,
<https://www.jpf.go.jp/j/about/press/2019/dl/2019-029-02.pdf> (2020年1月5日閲覧)
- [9] 佐藤郁哉, 質的データ分析法, 新曜社, 2008